

THE ROTARY CLUB OF NAGOYA WAGO 名古屋和合 WEEKLY 2760 地区 REPORT

ENGAGE ROTARY CHANGE LIVES

ロータリーを実践しみんなに豊かな人生を

2013-2014年度 国際ロータリー会長 ロンD.バートン



2013-2014年度 会長 鶯塚貞長 幹事 服部 滋 クラブ会報委員長 佐藤公俊
創立/1972年3月15日 例会日/水曜日 12:30~13:30
例会場/ウェスティンナゴヤキャッスル 名古屋市西区樋の口町3-19 ☎ 451-8551

TEL 052-523-1998 FAX 052-531-0727

2014 February 5

■ 2013~2014年度方針

“原点に戻り 品格あるアドバンス”
Return to basics Advance with intelligence

NO.28

例会報告

- 第2024回例会 平成26年2月5日（水）晴
 - 2月は世界理解月間
 - 君が代
 - ロータリーソング 奉仕の理想
 - 出席報告 会員 106名中 (99) 出席 65名
- 出席率65.66% 修正出席率84.95% (1月22日分)

●ゲスト紹介

- ・米山奨学生 デバコタ・ジバナド君
- ・青少年交換学生 フローレント・ソールホール君

●ニコボックス

「平成26年1月31日に大変名誉なことに、天皇・皇后両陛下がリゾートトラスト東京本社にまいられました。両陛下は当社障害者社員の働きぶりを観察され全ての社員にお声をかけられました。私も光栄にも20分間の歓談をさせていただきました。」 伊藤勝康君

「2月3日に名古屋商工会議所中央支所の依頼で講演会の講師をさせて頂きました。加藤一郎さんを始め多数の方に参加頂き、自分で言うのもなんですが「好評」でした。」 安井隆豊君

「やっと復帰して来ました。皆々様のご厚情に感謝します。」 上村晋也君

「先日、安井隆豊さんの講演会に行ってきました。ギャラリーが少ないと応援に行きましたが、大入満員でした。これからも、ロータリーの友情を大切にしたいと思います。」 加藤一郎君

「さようなら、伊藤鑑一さん」 天野倣明君、上村晋也君、安井隆豊君

加治佐健二君、宮下幸二郎君、國分孝雄君

服部 滋君、坪井和義君、近藤東臣君

柏木博喜君、今村孝治君、天野清美君

柏木順巣君、伊藤勝康君、富島照男君

本日のニコボックス	5件	90,000円
累 計	157件	1,598,000円

服部 滋幹事報告

△当クラブ行事予定

- ・2月19日（水） 例会終了後、クラブアッセンブリー、アッセンブリー終了後、理事会を行います。
- ・2月26日（水） 東名古屋分区IM全員登録。
受付開始 15時
開会式典 16時
懇親会 18時30分～20時
名古屋錦RCさんホスト、場所はウェスティンナゴヤキャッスルです。
通常例会（12時30分～13時30分）はございません。

※行事予定では、5月28日（水）が春の家族会になっていますが、5月21日（水）を変更し、5月17日（土）に家族会を開催致します。5月28日（水）

は通常例会になります。

- ・5月17日（土） 新名古屋ミュージカル劇場
エントランスに12:30～集合
劇団四季ミュージカル「美女と野獣」13:00～15:50予定
観劇後ウェスティンナゴヤキャッスルにて例会（18:00～）及び懇親会開催

鶯塚貞長会長挨拶

“日展”

私が作陶の道に入ったのは、父が陶芸界の巨匠たちと親交が厚く、その作品のいささかの収集があり、日常雑器以外の美術陶磁器に、幼少の頃より慣れ親しむ環境に育ったことが要因の1つです。

その影響か、芸術陶器の図柄は、マテイックであるとの刷り込みがあり、小学校での楽焼の時間で、皆が花や小鳥の絵を書くのに、私だけが抽象的な絵付けをし、この子は頭がおかしいのではないかと、先生に大変ご心配をお掛けしたこともありました。

日本では安土・桃山時代、中国では宋や唐代の古陶器に興味があり、ニューオリンズの学会の際、アンティークショップでの、宋代の青磁（影青）と出会いで、古陶磁器の収集にスイッチが入りました。

狂犬病、鳥インフルエンザ、BSEなどの、現地調査に託け、ヨーロッパ、上海、成都、そしてベトナムへと、骨董の旅は世界を駆け巡りました。

時に、何の価値もないどんぶり鉢を掴まされるなど、いわゆる月謝も払っている内に徐々に目が肥え、古陶磁の作者には巨匠など存在せず、その大半は名も無き職人の作であることを知り、今度は作陶意欲にスイッチが入りました。

そして、国内の内外を問わず、博物館・美術館などの名品を、機会あるごとに丹念に鑑賞し、感性を磨く師匠としました。

公募展などへの挑戦は、全く眼中にありませんでしたが、ある時、「作品はいくら優品を作陶しても、世の中といふものは客觀的評価、すなわち、名の有る公募展の賞歴が無ければ、大切に扱われないよ」との、善意のご意見を頂き、やむなく公募展へのエントリーとなりました。

初陣の市民芸術祭で、2年連続市長賞授賞、その後入会した現代工芸美術家協会の公募展で入選を重ね、協会創立50周年記念展で、現代工芸賞を授賞したことを契機に、芸術家にとっては、日本で一番険しく高い山である“日展”へ挑戦し、今までに2度の入賞を果しました。

「日展に入選する要件は何でしょう」、一番多い質問です。

先ずは大作であることで、陶芸ではかなり大型のオブジェ、絵なら100号以上です。なぜ大作か、それは、ごまかしが絶対に通用せず、作家の実力を正確に知ることができます。

日展は一人横綱ですから、先ずは三役級の公募展で、少なくとも5回以上の入選を重ね、さらには、グランプリに相当する授賞をすることで、すなわち手順を踏むことが不可欠で、一足飛びは不可能でしょう。

